
第六話

将門謀叛事付内裏造堂事

『前太平記』上 卷第一 二十七頁から二十八頁より

さて、この時に桓武天皇の曾孫で、前将軍平良将の息子に、滝口小次郎・相馬などと名乗った平将門という人がいる。その性質は狼戾で礼法に縛られず、その身に

其為人狼戾にして礼法に拘わらず、

合わない目標を掲げて朝廷を滅ぼし無理に帝位に上ろうと思いついた不屈き者であ

非望を謀つて朝家を傾け、 推して帝位に登らんと思ひ立ちしぞ不敵なる。

る。

やがて驕りは日増しに大きくなり下総国猿島石井郷に都を作り、磯橋を都の山崎に見立て、相馬郡の津を京の大津と見立てた。ところで、大内裏と申し上げますものは、南北に三十六町、東西に二十町で、四方に十二の門が建てられている。東には、陽明・待賢・郁芳門、南には美福・朱雀・皇嘉門、西には談天・藻壁・殷富門、北には安嘉・偉鑿・達智門がある。紫宸・清涼・温明殿、日花・月花の両門、陳座・軒廊・左右の宮廷、南殿の階下には右近の橘も、左近の桜も生い出て若々し

く、中央には鳥の旗、左には日の旗と青竜・朱雀の旗、右には月の旗と玄武・白虎の旗が、バサバサと輝いて、風にたなびき、日に照らされている。その他に七十二

再々暉々として 風に鬨き 日に映ず。

の前殿、三十六の後宮があり、屋根は鳳があしらわれ天へと向かい、虹梁^(巻)が雲に

鳳の薨天に翔り、 虹の梁雲に

向かってそびえ、どの殿・門も軒を並べ、これほど立派に建て連ねたところを見る

聳え、

と、まるで、秦の咸陽の宮殿の様子もこれには勝るだろうか。それを作るための財

其費幾何ぞや。

はどれほどに至ったのか。租税を非常に重くし、貢物を奪い取り、これらのものを

貢税を虐げ、 官物を掠め、

盗むのはごく僅かにとどめ、この方法を用いること、泥や砂のように（数知れな

之を取ること錙銖を尽くし、 之を用ゆること 泥沙の如し。

い）。それゆえ、道を急ぐ旅人も、これのせいで道をふさがれ、農民も、それに作

物を奪われ、農業が妨げられる。すぐに将門は自らを平親王と名乗り、百官を従

え、多くの官職を定める。最初に、舎弟である御厨三郎（平将頼）を下野守とし

て、同じく大葦原四朗（平将平）を上野介、将為は下総守、将武は伊豆守、常羽御

厩別当の多治経明は常陸介、藤原玄茂は上総介、武蔵権守興世は安房守、文屋好兼は相模守、その他、大臣、納言、八座七弁、文武両官、八省百官、諸国の受領、諸寮諸司、すべて決めて、その欠けている官職は、たった暦博士^(貳)だけである。武骨な東国の荒武者ども、着なれぬ衣冠を身にまとい、位に準拠し列をなす。ある者は冠を間違っかぶり、ある者は先行く者の裾を踏んでは引っ張って転ばせる。

或ひは冠を横様に引き立てさせ、 又は前駆の人の裾を踏まへては、俯しに引き倒す。

またある者は、「今宵はどこそこの大納言の元に褒貶の歌合せ^(参)があつて行って

或ひは、 「今宵何某大納言の許に、褒貶の歌合有りて罷る」

参る」などと言ってフラフラと歩いて行った。どのような歌を詠んだのだろうか。

など云ひて吟呻行く。

何を言ったのだろうか。その様子を見たら、たいそうなもので、今聞くことまでもきまりが悪い。ああ、天に二つの日がないといっても、今国に二人の王がいる。

呼鳴、天に二つの日無しと云へども、 今国に二人の王あり。

きつと言われるだろう。身に余る振る舞いの酷いこと、これを隠すことが出来ると

謂つべし、 僭踰の甚だしきこと、 是をも忍ぶべくんば、

すると、どれを隠すことが出来るのだろうか。

孰れをか忍ぶべからざらんや。

注釈

- ※壺・虹梁……社寺建築に用いる、やや反りを持たせて造った化粧梁。
 - ※式・曆博士……陰陽寮に属し、曆を作り、曆生に曆道を教えた長官。
 - ※参・褒貶の歌合せ……一座の者が人々の作った歌をその場で批評する歌合。
-

『前太平記』初の長編ストーリーの始まりです。前回の鹿のくだりは将門による謀叛の前兆でした。訳をしているときには、漫画のワンシーンのようでワクワクしました。古典文学ではありがちな表現かもしれませんが、『前太平記』でも朝廷に刃向う者たちは卑しい者としてこき下ろすように描写されます。これから将門たちが、どのように表現されて登場するかに注意をしながら読むのも面白いかもしれません。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子